

# 日本語における 格助詞の交替現象について

塚 本 秀 樹

## 1. はじめに

日本語を観察すると、数多くの種類の格助詞の交替現象が見出される。これまでその一部の個々については議論がなされてきたが、全体を網羅して考察したものはなく、より深く追求すべき問題もたくさん残されている。本稿では、日本語における格助詞の交替現象を分類・整理し、全体にわたって見通すことを第一の趣旨としたい。従って、格助詞の交替現象に関する特定の問題だけを扱って考察することは別の機会に譲り、また紙面の制約もあるので、筆者がすでに論じたことのある内容については、エッセンスだけを述べることにし、その詳細は、参考文献に挙げた拙稿を参照して頂ければ、ありがたい。

## 2. 格助詞の交替現象の種類

### 2.1. 単一の格助詞同士の交替

#### 2.1.1. 「が」と「の」<sup>1)</sup>

日本語の連体修飾構文においては、「が」で表示しても「の」で表示してもよいと思われる補語がある。それは、例えば、次の例に示されるとおりである。

- (1) a. 先生が買った本
- b. 先生の買った本
- (2) a. お金が必要な人
- b. お金の要る人

また、(1)(2)のように「本」や「人」などの実質名詞を主要語とした連体修飾構文ばかりではなく、(3)のように、「時」「ところ」「こと」「の」といった形式名詞を主要語としたものにおいても、補語を表示するのに「が」と「の」の両方が許される場合がある。

(3) a. 友達が来た時

b. 友達の来た時

(1)と(3)は、「先生 {が/の}」「友達 {が/の}」という補語が主語に相当するもので、その主語の補語における「が」と「の」の交替の例であり、(2)は「お金 {が/の}」という補語が直接目的語に相当するもので、その直接目的語の補語における「が」と「の」の交替の例である。

ところが、主語と直接目的語を表示する「が」がすべての場合、「の」に交替可能かと言うと、そうではなく、「の」が用いられて文が認められるには、制約が課される。

まず、一つは、「が」が「の」に交替しうるのは先ほど少し見たような連体修飾構造、言い換えれば、補語の下に埋め込まれた補文の場合に限定される、ということである<sup>2)</sup>。それは、次のような観察によってもわかる。(1)(2)の主要語を元の位置にもどし、連体修飾前の構造にしてみると、「が」では表示可能であるが、「の」は許されない。

(4) a. 先生が本を買った。

b. \* 先生の本を買った。<sup>3)</sup>

(5) a. (その)人 {に/が} お金が必要。

b. \* (その)人 {に/が} お金の要る。

このように、「の」が連体修飾構造における場合に限られるのは、「が」が連用修飾の格助詞であるのに対して、「の」が連体修飾の格助詞である、という性質の相違によっているからであると思われる。

また、次のような例が見出される。

(6) a. 弟が友達にやった本

b. \* 弟の友達にやった本<sup>4)</sup>

このように、連体修飾構造にあっても、「が」は認められるが、「の」は認められないことがある。これは、制約の二つ目として、「の」で表示された主語或いは直接目的語のすぐうしろに別の補語が現れると、「『名詞句』の『名詞句』」という構造になって所有の意味を有すると解釈されてしまうため、文法性が低くなる、と説明される<sup>9)</sup>。(6a)の「が」の場合は当然、十分に許容されるが、(6b)の「の」の場合は「弟の友達」で一つの名詞句と見なされ、「弟の」単独では主語として解釈されない、という意味論的な原因により認められないわけである。これも、「が」が有する連用修飾の機能と、「の」が有する連体修飾の機能の相違が根底にあると思われる。

次のような例も観察される。

- (7) a. 花子が買った服  
 b. 花子がきのう買った服  
 c. 花子がきのうスーパーマーケットで買った服  
 d. 花子がきのうスーパーマーケットで急いで買った服  
 e. 花子の買った服  
 f. ?花子のきのう買った服  
 g. ??花子のきのうスーパーマーケットで買った服  
 h. \*花子のきのうスーパーマーケットで急いで買った服

このように、「の」で表示された補語のうしろに別の補語とは限らず、副詞的な要素が現れても、文全体の文法性は低くなる。今の観察の結果と、先ほどの二つ目の制約をまとめると、次のような制約を提出することになる。それは、「の」で表示された主語或いは直接目的語と述語との間に、他の補語や副詞類などの構成要素が長く介在すればするほど、その文全体の文法性は低くなる、というものである<sup>10)</sup>。それに対して、(7a~d)に示されるように、「が」で表示された補語と述語との間に他の構成要素が長く介在しても、その文は適格文である。日本語においては、上記の制約に抵触しない限り、主語及び直接目的語を表示する「が」が「の」に交替可能であって、その制約の存在が「が」よりも「の」の使用範囲を狭くしているということが、以上の観察によってわか

る。

## 2.1.2. 「に」と「が」<sup>7)</sup>

(8)の「できる」という可能を表す動詞、(9)の「～{れる／られる}」という可能を表す動詞句、(10)の「わかる」や(11)の「見える」という自意志によらない感覚動詞、(12)の「ある」という所有を表す動詞、(13)の「要る」という必要を表す動詞を用いた場合、それぞれ(a)が示すように、経験者の補語は「に」で、対象の補語は「が」で表示される。

- (8) a. 太郎にスキーができる。  
b. 太郎がスキーができる。
- (9) a. 僕に朝鮮語が話せる。  
b. 僕が朝鮮語が話せる。
- (10) a. 木村君に英独仏の三か国語がわかる。  
b. 木村君が英独仏の三か国語がわかる。
- (11) a. あなたにあの白いビルが見えますか。  
b. あなたがああの白いビルが見えますか。
- (12) a. 田中元首相に莫大な財産がある。  
b. 田中元首相が莫大な財産がある。
- (13) a. 私立大学の学生を子に持つ親に多額の金が必要。  
b. 私立大学の学生を子に持つ親が多額の金が必要。

ここで注意すべきことは、(a)における経験者の補語を表示する「に」に取って代わって、(b)のように「が」が現れることもできる、ということである。ただ、(8)～(13)における動詞(句)は状態述語であるので、経験者の補語を「が」で表示すると、総記(Exhaustive Listing)の読みを有することになる<sup>8)</sup>。従って、実際の発話の中で中立叙述(Neutral Description)の意味を表すためには、その問題の補語が主題化され、取り立て助詞の「は」で表示されるのが普通である。

### 2.1.3. 「が」と「を」<sup>9)</sup>

「～{れる／られる}」という可能を表す動詞句の場合、(14a)のように、経験者の補語は「に」で、対象の補語は「が」でそれぞれ表示される。

- (14) a. 僕に朝鮮語が話せる。
- b. \*僕に朝鮮語を話せる。
- c. 僕が朝鮮語が話せる。
- d. 僕が朝鮮語を話せる。

(14a)における対象の補語を表示する「が」に代わって、(14b)に示すように「を」を用いることはできない。それに対して、(14c)は、2.1.2.で見たように、(14a)における経験者の補語を表示している「に」が「が」に交替したものであるが、(14d)のように、(14c)の対象の補語を表示する「が」の代わりに「を」を用いることが許される。すなわち、「～{れる／られる}」という可能表現にあっては、経験者の補語を表示する格助詞が「に」から「が」になった場合に限り、対象の補語を表示する「が」が「を」と交替可能だというわけである。

(14)の例から興味深い点が指摘できる。それは、(14a, c, d)の文法文はすべて、補語の少なくとも一つが「が」で表示されているのに対して、(14b)の非文法文だけは「が」で表示された補語が一つもない、ということである。このような事実の観察によって、柴谷(1978:256)は、文は少なくとも一つの「が」格補語を含んでいなければならない、とする「主格保持の原則」を提案している。換言すると、文は「が」で表示されている補語を欠いていけば、非文法文になるというわけである。

また、「～たい」という願望を表す動詞句の場合、(15a)のように、経験者の補語と対象の補語の両方が「が」で表示される。

- (15) a. 僕がヨットが買いたい。
- b. 僕がヨットを買いたい。

この構文の場合も、(15b)に示されるように、対象の補語を表示する「が」を「を」に置き換えることができる。

「が」と「を」の使用を比較してみると、「が」のほうに制約が課せられているのがわかる。その制約というのは、「が」で表示された補語と動詞（句）の間に別の構成要素が長く介在すればするほど、その文全体の文法性は低くなる、というものである<sup>10)</sup>。

#### 2.1.4. 「が」と「から」<sup>11)</sup>

(16) の「伝える」、(17) の「わたす」、(18) の「話す」、(19) の「贈る」、(20) の「申し込む」に共通するのは、3項動詞であって、「を」で表示された補語の事物或いは人物が「が」で表示された補語の人物から「に」で表示された補語の人物に移動するという方向性を含蓄しており、それ故に「が」で表示された補語がその移動の起点に、「に」で表示された補語が着点にそれぞれなっている、ということである。さらにそれに加えて、「が」で表示された補語は行為をなす主体、つまり動作主という意味的な役割をも有している。従って、このような構文における「が」で表示された補語は、動作主と源泉という二つの意味役割の重なりが生じているということになる。今、問題の補語の格表示に、動作主を表す場合の一般的な格表示である「が」が用いられているのが(a)であるが、その補語は源泉という意味役割をも有するのであるから、(b)が示すように、「が」は起点を表す格助詞の「から」と交替可能である。

(16) a. 父が先生に伝える。<sup>12)</sup>

b. 父から先生に伝える。

(17) a. あなたが課長にわたしてほしい。

b. あなたから課長にわたしてほしい。

(18) a. 僕が彼に話したのはそれだけだ。

b. 僕から彼に話したのはそれだけだ。

(19) a. 展覧会の主催者が H 氏に金賞を贈ることが決まった。

b. 展覧会の主催者から H 氏に金賞を贈ることが決まった。

(20) a. あなたが結婚してほしいと私に申し込んだくせに。

b. あなたから結婚してほしいと私に申し込んだくせに。

2.1.5. 「に」と「から」<sup>13)</sup>

(21) の「借りる」、(22) の「教わる」、(23) の「もらう」はすべて、3項動詞であって、「を」で表示された補語の事物或いは人物が「に」で表示された補語の人物から「が」で表示された補語の人物に移動するという方向性を含蓄しており、それ故に「に」で表示された補語がその移動の起点に、「が」で表示された補語が着点にそれぞれなっている、ということが共通点である。さらにそれに加えて、「に」で表示された補語は行為が向けられる相手という意味的な役割をも有しており、従って、このような構文における「に」で表示された補語は、相手と源泉という二つの意味役割を合わせ持っているわけである。今、問題の補語を、相手を表す場合に用いられる「に」で表示しているのが(a)であるが、その補語は源泉という意味役割をも有するのであるから、(b)が示すように、「に」は起点を表す格助詞の「から」に置き換えることができる。

(21) a. 太郎が花子にお金を借りた。

b. 太郎が花子からお金を借りた。

(22) a. 太郎が花子に英語を教わった。

b. 太郎が花子から英語を教わった。

(23) a. 私が友達に本をもらった。

b. 私が友達から本をもらった。

ただ、「預かる」や「買う」のようないくつかの動詞の場合には、今、問題にしている補語は「に」を取ることが困難であり、「から」で表示されるのが普通である。

(24) a. \* 僕が友達に財布を預かった。

b. 僕が友達から財布を預かった。

(25) a. \* 兄が伯父に車を買った。<sup>14)</sup>

b. 兄が伯父から車を買った。

2.1.6. 「を」と「に」<sup>15)</sup>

日本語における2項動作動詞文を統語的な側面から観察すると、一方の補語は「が」で表示され、もう一方の補語は「を」「に」「と」のいずれかで表示されるのがわかるが、動詞によっては、その格助詞の一つしか認められないというのではなく、その内の二つが使用可能な場合がある。ここで取り上げるのは、今、問題の補語を表示するのに「を」と「に」のどちらをも採用することができる場合、すなわち「を」と「に」の交替を許す場合である。

- (26) a. 僕の友達が貴重な絵をさわった。  
       b. 僕の友達が貴重な絵にさわった。
- (27) a. 中曾根が田中を頼った。  
       b. 中曾根が田中に頼った。
- (28) a. 太郎が貧しさを耐えた。  
       b. 太郎が貧しさに耐えた。
- (29) a. クラブの合宿のためにマネージャーが安い民宿を当たった。  
       b. クラブの合宿のためにマネージャーが安い民宿に当たった。

「を」と「に」の交替が認められる動詞は、(26)～(29)の「さわる」「頼る」「耐える」「(旅館など{を/に})当てる」の四つぐらいしかなく、次の2.1.7.で扱う「に」と「と」の交替を許す動詞に比べると、数ははるかに少ない。

2.1.7. 「に」と「と」<sup>16)</sup>

2.1.6.で、2項動作動詞文における片方の補語が「を」「に」「と」のいずれかで表示され、動詞によっては、その内の二つが用いられうる場合があることを指摘したが、ここでは、その補語を「に」でも「と」でも表示できる場合、すなわち「に」と「と」の交替が認められる場合を取り上げる。

- (30) a. バスがトラックに衝突した。  
       b. バスがトラックと衝突した。
- (31) a. 太郎が先輩に相談した。  
       b. 太郎が先輩と相談した。



このように、「衝突する」や「相談する」といった動詞は、今、問題の補語を表示するのに「に」と「と」のどちらを要求してもよい。このような「に」と「と」の交替を許す動詞としては、他に「会う」「ぶつかる」「つき合う」「一致する」「似る」などがある。

ところが一方、「質問する」という動詞は、(32)に示したように、「に」の使用は可能であるが、「と」の使用は不可能であり、また「結婚する」という動詞はその逆で、(33)に示したように、「と」は認められるが、「に」は許されない。

- (32) a. 学生が先生に質問した。  
b. \*学生が先生と質問した。
- (33) a. \*礼宮様が紀子さんに結婚した。  
b. 礼宮様が紀子さんと結婚した。

前者と同じふるまいをなす動詞には、他に「答える」「惚れる」「甘える」などがあり、後者と同じふるまいをなす動詞には、他に「離婚する」「戦う」「けんかする」などがある。

ここで、「に」を用いた場合と「と」を用いた場合とでは、明らかに意味の違いがあることを指摘しておかなければならない。(30)を例にとると、「に」の場合には、バスが止まっているトラックに一方的にぶつかる、というような意味を表すが、「と」の場合には、バスとトラックがともに動いていてぶつかり合う、というような意味を表す。

このような意味の相違に基づくと、なぜ、(34) (35)の(a)が文法的であるのに、(b)が非文法的であるのか、ということに対してうまく説明を与えることができる。

- (34) a. 自動車が電柱にぶつかった。  
b. \*自動車が電柱とぶつかった。
- (35) a. 太郎が災難に会った。  
b. \*太郎が災難と会った。

「電柱」「災難」が物理的に動き得るという特性を有する名詞ではなく、この

ことが、「に」を用いた場合の一方的な移動の意味合いとは合致するが、「と」を用いた場合の相互的な移動の意味合いとは矛盾するわけである<sup>17)</sup>。

### 2.1.8. 「が」と「で」<sup>18)</sup>

「が」格補語が動作主の意味役割を果たしており、なお且つその補語に場所性という特性を有する名詞が現れたり<sup>19)</sup>、その補語内の名詞が機関やある資格を持った人を指したり<sup>20)</sup>する場合には、「が」に代わって「で」で表示することもできる。

(36) a. 警察が事の真相を発表した。<sup>21)</sup>

b. 警察で事の真相を発表した。

(36)における「警察が」は動作主を表しているが、「警察」は場所性という特性を有する名詞であり、機関でもあるので、「が」を「で」に置き換えることができる。

(37) a. 日取りは、あなたが決めて下さい。<sup>22)</sup>

b. \*日取りは、あなたで決めて下さい。

(38) a. ?日取りは、あなたのほうが決めて下さい。

b. 日取りは、あなたのほうで決めて下さい。

(37)の「あなた」、(38)の「あなたのほう」はともに、動作主として機能している名詞である。しかし、前者は場所性という特性を有していないのに対して、後者は「~のほう」という場所的な要素が加えられて、場所性という特性を有するようになったものである。従って、「が」と「で」の交替は前者においては生じないが、後者においては生ずる、という違いが出て来る。

ところが、(37)で見たように、「あなた」の場合には「が」を「で」に替えることはできないが、

(39) a. 日取りは、あなた {達/方} が決めて下さい。

b. 日取りは、あなた {達/方} で決めて下さい。

のように、「あなた {達/方}」なら、「が」も「で」も使用可能である。このように、場所性という特性を持っていなくても、複数形などでグループや団体

を表している場合には、「で」を使うことが許されるのである<sup>23)</sup>。

### 2.1.9. 「を」と「から」<sup>24)</sup>

移動を表す表現の内の「出どころ」を表す表現において、源泉の意味役割を担う補語は「を」で表示されるが、移動の起点を表しているので、「を」は起点の意味を含有する格助詞「から」と一般的に交替可能である。

- (40) a. 太郎がバスを降りた。  
b. 太郎がバスから降りた。
- (41) a. 船が港を離れた。  
b. 船が港から離れた。

このような「を」と「から」の交替を許す動詞には、他に「出る」「出発する」などがある。

しかしながら、「卒業する」という動詞の場合は、「を」は使用可能であるが、「から」は容認されない。

- (42) a. 太郎が大学を卒業した。  
b. \* 太郎が大学から卒業した。

このことに対して、寺村 (1982:107, 120) は、出発点が物理的な場所というよりは観念的な場所、ないし制度や状態として考えられている場合には「から」は用いられない、というような説明を与えている。

さらに、寺村 (1982:107) は、(43) (44) のような例文を挙げ、「出どころ」を表す表現で、生き物、有情物の意識的な動きの場合、問題の補語は「を」と「から」の交替を許すが、自然な動きの場合、「から」しか取れない、ということを指摘している。

- (43) a. \* 煙が部屋を {出る / 出て行く}。  
b. 煙が部屋から {出る / 出て行く}。
- (44) a. 彼が部屋を {出る / 出て行く}。  
b. 彼が部屋から {出る / 出て行く}。

また、「を」でも「から」でも表示されうるが、前者の場合と後者の場合と

では、その実質的な意味内容が異なることがある。

- (45) a. 千代の富士は土俵を降りた。  
 b. 千代の富士は土俵から降りた。  
 (46) a. あの熱弁家は演壇を降りた。  
 b. あの熱弁家は演壇から降りた。

(45) (46) の(b)はともに、「土俵」「演壇」という場所からそれよりも低いある場所へ移動したというような実際の場面を意味するだけであるが、それぞれの(a)は、そのような意味を表しうる他に、実際の場面的な意味から派生して「相撲界から引退する」「人前で話をする職業をやめる」というようなことも含蓄する。こういったことは、「降りる」以外の動詞の場合では観察されないことから、格助詞の交替現象自体による影響ではなく、むしろ「降りる」という動詞が含有する意味的なことに起因すると思われる。

#### 2.1.10. 「に」と「で」<sup>25)</sup>

2項動作動詞文の内の「対面」の表現において、相手という意味役割を果たす補語は「に」で表示されるが、その補語が原因を表す場合には原因の意味を含有する格助詞「で」で表示することもできる。

- (47) a. 友達が失恋に悩んでいる。  
 b. 友達が失恋で悩んでいる。  
 (48) a. 父が借金に苦しんだ。  
 b. 父が借金で苦しんだ。

(47) では、「失恋」が太郎の悩んでいる原因に、(48) では、「借金」が父の苦しんだ原因にそれぞれなっている。

それに対して、(49) の「肺ガン」も (50) の「火山の噴火」も原因を表しているので、「で」による表示は可能であるが、「死ぬ」と「失う」という動詞が2項動作動詞文の内の「対面」の表現を成立させることができないため、「に」の使用は許されない。

- (49) a. \*彼は肺ガンに死んだ。

- b. 彼は肺ガンで死んだ。
- (50) a. \*多くの人達が火山の噴火に家を失った。
- b. 多くの人達が火山の噴火で家を失った。

#### 2.1.11. 「で」と「から」<sup>26)</sup>

原因を表す補語は、一般的に「で」で表示されるが、その原因が出来事の出どころと見なされる場合には、「から」で表示される。

- (51) a. その運転手は前方不注意で大事故を起こした。
- b. その運転手は前方不注意から大事故を起こした。
- (52) a. 私達はささいなことでけんかをしてしまった。
- b. 私達はささいなことからけんかをしてしまった。

また、判断の材料を表す補語は、「で」で表示されるが、それが判断の出どころと見なされる場合には、「から」を取る。

- (53) a. 話す言葉の特徴で出身地がわかることがある。
- b. 話す言葉の特徴から出身地がわかることがある。
- (54) a. 人を外見だけで判断してはいけない。
- b. 人を外見だけから判断してはいけない。

#### 2.1.12. 「に」と「へ」<sup>27)</sup>

移動を表す表現において、目的地になっている補語は到達点を表す格助詞「に」で表示されるが、方向を表す「へ」でも表示できることが多い。

- (55) a. 父が東京に行った。
- b. 父が東京へ行った。
- (56) a. 学生が教室に入った。
- b. 学生が教室へ入った。

移動の意味を含有する動詞でも移動の様態にはそれぞれ違いがあり、(57)の「着く」のように、移動の到達ということがより明白な場合には、「へ」よりも「に」が使われるのが普通であり、また(58)の「出発する」のように、

移動の到達というよりも移動の方向という概念が一層明らかな場合には、「に」よりも「へ」のほうが好まれる。

(57) a. 電車が駅に着いた。

b. ?電車が駅へ着いた。

(58) a. ?父がオーストラリアに出発した。

b. 父がオーストラリアへ出発した。

(59) の「反対する」、(60) の「惚れる」、(61) の「憧れる」は、2項動作動詞文の内の「対面」の表現を成立させる動詞であるが、この表現の場合は、「に」による表示しか許されず、「へ」の使用はまず不可能である。

(59) a. 野党が予算案に反対した。

b. \*野党が予算案へ反対した。

(60) a. 秘書が社長に惚れていた。

b. \*秘書が社長へ惚れていた。

(61) a. 弟がパイロットに憧れた。

b. \*弟がパイロットへ憧れた。

### 2.1.13. 「に」「へ」と「まで」<sup>28)</sup>

移動を表す表現において、目的地になっている補語は「に」でも「へ」でも表示できることが多い、ということをも2.1.12.で指摘したが、その補語が移動の終わる場所を表す時には、「まで」を用いる。

(62) a. 母が駅 {に/へ} 行った。

b. 母が駅まで行った。

### 2.1.14. 「に」と「まで」<sup>29)</sup>

相手という意味役割を果たす補語は「に」で表示されるが、それが移動の終わる場所と見なされる場合には、「まで」で表示することもできる。

(63) a. 詳細は事務局にお問い合わせ下さい。

b. 詳細は事務局までお問い合わせ下さい。

- (64) a. 参加希望者は幹事に申し出ること。
- b. 参加希望者は幹事まで申し出ること。

このような格助詞の交替を許す動詞には、他に「申し込む」「請求する」「連絡する」「知らせる」「伝える」などがある。

#### 2.1.15. 「と」と「から」<sup>30)</sup>

- (65) a. 父が家族と離れて暮らす。<sup>31)</sup>
- b. 父が家族から離れて暮らす。
- (66) a. 太郎が恋人と別れた。
- b. 太郎が恋人から別れた。

このように、「離れる」「別れる」という動詞の場合には、「と」と「から」の交替が認められる。

#### 2.1.16. 「を」と「の」<sup>32)</sup>

- (67) a. 切符を買っていない人はありませんか。
- b. 切符の買っていない人はありませんか。
- (68) a. 切符をお持ちでない方は、車掌までお申し付け下さい。
- b. 切符のお持ちでない方は、車掌までお申し付け下さい。

この格助詞の交替現象は、(67) (68) に示された文ぐらいの、非常に限られた場合にしか見出されないものである。

### 2.2. 単一の格助詞と複合格助詞の交替<sup>33)</sup>

#### 2.2.1. 「で」と「～において」<sup>34)</sup>

行為がなされる場所は、単一の格助詞「で」でも複合格助詞「～において」でも表示可能である。

- (69) a. 国際数学会議が京都国際会議場で開催された。
- b. 国際数学会議が京都国際会議場において開催された。
- (70) a. 委員会は第1会議室で行います。

- b. 委員会は第1会議室において行います。

ただ、「～において」は、文章語的な表現として使われる傾向にある。

## 2.2.2. 「を」と「～について」「～に関して」<sup>35)</sup>

(71b) においては、「問題点について」は動詞「論じる」にとって必須補語であり、また (72b) においては、「夢について」は動詞「語る」にとって必須補語である。このような必須補語になっている「～について」「～に関して」は、「を」に置き換えることができる。

- (71) a. 山田教授が講義で日韓関係の問題点を論じた。  
b. 山田教授が講義で日韓関係の問題点について論じた。  
(72) a. 生徒達は将来の夢を語り合った。  
b. 生徒達は将来の夢について語り合った。

それに対して、(73b) の「歴史に関して」は動詞「出す」にとって必須補語ではなく、副次補語であり、また (74b) の「アスペクトについて」も動詞「書く」にとって必須補語ではなく、副次補語である。このような副次補語になっている「～について」「～に関して」は、「を」に置き換えることができない。

- (73) a. \*先生は中国の歴史を問題を出した。  
b. 先生は中国の歴史に関して問題を出した。  
(74) a. \*Aさんは最近アスペクトを論文を書いた。  
b. Aさんは最近アスペクトについて論文を書いた。

ところが、必須補語になっている「～について」「～に関して」でも、(71) の「問題点」や (72) の「夢」のように「内容性」といった特性を有する名詞が現れている場合は、難なく「を」に置き換え可能であるが、(75) の「採用」のように「内容性」といった特性が弱い名詞を伴う場合は、「を」への置き換えはかなり難しい。

- (75) a. ?会社側が大学新卒者の採用を説明した。  
b. 会社側が大学新卒者の採用に関して説明した。



### 2.2.3. 「に」と「～に対して」<sup>36)</sup>

(76b)の「尋問に対して」、(77b)の「ドイツ軍に対して」、(78b)の「社長に対して」はそれぞれ、動詞「答える」「抵抗する」「要求する」にとって必須補語である。このような必須補語になっている「～に対して」は、「に」に置き換えることが可能である。

- (76) a. 容疑者が警察の尋問に答えた。  
b. 容疑者が警察の尋問に対して答えた。
- (77) a. フランス軍がドイツ軍に抵抗した。  
b. フランス軍がドイツ軍に対して抵抗した。
- (78) a. 社員達は社長に待遇の改善を要求した。  
b. 社員達は社長に対して待遇の改善を要求した。

それに対して、(79b)の「姉さんに対して」は、動詞「惜しむ」にとって必須補語ではなく、副次補語であり、このような副次補語になっている「～に対して」は、「に」に置き換えることは許されない。

- (79) a. \*叔父さんが姉さんに讃美を惜しまない。  
b. 叔父さんが姉さんに対して讃美を惜しまない。(森本薫著『女の一生』<sup>37)</sup>

### 2.2.4. 「に」と「～にとって」<sup>38)</sup>

(80b)の「私にとって」、(81b)の「研究員にとって」は、状態表現における判断主体・感情主体になっており、それぞれ「ありがたい」「好都合である」にとって必須性の高い補語である。このような場合の「～にとって」は、「に」に置き換えることができる。

- (80) a. 友人の援助は私に(は)ありがたかった。  
b. 友人の援助は私にとって(は)ありがたかった。
- (81) a. その計画は研究員に(は)好都合である。  
b. その計画は研究員にとって(は)好都合である。

ところが一方、今、述べたようにはなっていない「～にとって」は、「に」

に置き換えることは不可能である。

- (82) a. \*髪は女性に命である。  
 b. 髪は女性にとって命である。
- (83) a. \*あなたに幸福とは一体何でしょうか。  
 b. あなたにとって幸福とは一体何でしょうか。

### 2.2.5. 「に」と「～によって」<sup>39)</sup>

- (84) a. 人質が犯人に殺された。  
 b. 人質が犯人によって殺された。
- (85) a. ? 行方不明だった漁船が自衛隊機に発見された。  
 b. 行方不明だった漁船が自衛隊機によって発見された。
- (86) a. \* 遺伝子再構成のメカニズムが利根川博士の研究に解明された。  
 b. 遺伝子再構成のメカニズムが利根川博士の研究によって解明された。

いわゆる受身文における動作主 (Agent) のマーカーである「に」と「～によって」のどちらが選択されるかは、いろいろな要因が絡み合っており、それが総合されて決定されるわけであるから、条件づけを一つだけに絞り込むことはできないが、単一の格助詞と複合格助詞に関する意味論の観点からすれば、次のようなことが言えると思われる。「に」は、動詞や前置される名詞類など文における情報から判断できる Agentivity といった特性が高ければ、用いることができるが、そのような特性が低ければ、使いにくくなる。それに対して、「～によって」は、そのような特性の有無に関係なく、使用可能である。

### 2.2.6. 「より」と「～をおいて」<sup>40)</sup>

- (87b) のような「～をおいて」は、「より」と交替可能である。
- (87) a. この難題を解決できるのは、彼より他にいない。  
 b. この難題を解決できるのは、彼をおいて他にいない。

### 2.2.7. 「へ」と「～を指して」「～を目指して」<sup>41)</sup>

(88b) のような「～を指して」「～を目指して」は、方向を表す「へ」と交替可能である。

- (88) a. 徳川家康軍が大阪城へ攻め入った。  
b. 徳川家康軍が大阪城 {を指して/を目指して} 攻め入った。

### 2.2.8. 「に」と「～をして」<sup>42)</sup>

被使役者を表す「～をして」は、「に」に置き換えることができる。

- (89) a. 彼にそのような態度をとらせたものは何か。  
b. 彼をしてそのような態度をとらせたものは何か。

ただ、「～をして」を用いると、文全体がかたい文章語的な表現になる。

### 2.2.9. 「で」と「～をもって」<sup>43)</sup>

「～をもって」には次の三つの意味・用法があるが<sup>44)</sup>、いずれも「で」と交替できる。

- (90) a. これで本会議を終わります。  
b. これをもって本会議を終わります。[終わり・境界]  
(91) a. 私達は拍手で来賓を迎えた。  
b. 私達は拍手をもって来賓を迎えた。[方法・手段]  
(92) a. 彼は業務上過失致死の疑いで逮捕された。  
b. 彼は業務上過失致死の疑いをもって逮捕された。[理由・原因]

### 2.2.10. 「で」と「～でもって」<sup>45)</sup>

「～でもって」には次の四つの意味・用法があるが<sup>46)</sup>、すべて「で」との交替が認められる。

- (93) a. 申し込みは先着100人で締め切らせて頂きます。  
b. 申し込みは先着100人でもって締め切らせて頂きます。[限界]  
(94) a. 拍手で新郎新婦を祝福して下さいますよう、お願い致します。

- b. 拍手でもって新郎新婦を祝福して下さいますよう、お願い致します。[方法・手段]
- (95) a. タバコの不始末で大きな山火事となった。  
b. タバコの不始末でもって大きな山火事となった。[原因・理由]
- (96) a. 目上の人には、そんな生意気な態度で接してはいけない。  
b. 目上の人には、そんな生意気な態度でもって接してはいけない。  
[動作・過程の状態]

### 2.2.11. 「に」「で」と「～として」<sup>47)</sup>

(97) (98) において、「対日貿易赤字」と「大きな問題点」、「井戸水」と「飲料水」のそれぞれの間には、「対日貿易赤字は大きな問題点である。」「井戸水は飲料水である。」と言えるように、イコールの関係が成り立つので、文が同定認定の表現になっており<sup>48)</sup>、「大きな問題点として」「飲料水として」は、動詞「挙げる」「用いる」にとって必須性の高い補語で、用途や目的を表している。このような場合の「～として」は、「に」に置き換えることができる。

- (97) a. アメリカ政府は対日貿易赤字を大きな問題点に挙げている。  
b. アメリカ政府は対日貿易赤字を大きな問題点として挙げている。
- (98) a. この村は井戸水を飲料水に用いている。  
b. この村は井戸水を飲料水として用いている。

また、(99) (100) においても、「A氏」と「経済界の実力者」、「彼」と「プロ野球選手」のそれぞれの間にはイコールの関係が成立するので、文が同定認定の表現になっており、「経済界の実力者として」「プロ野球選手として」は、動詞「知られる」「通用する」にとって必須性の高い補語で、身分や役割を表している。このような場合の「～として」は、「で」に置き換え可能である。

- (99) a. A氏は経済界の実力者で知られている。  
b. A氏は経済界の実力者として知られている。
- (100) a. 彼はプロ野球選手で十分通用するかもしれない。

b. 彼はプロ野球選手として十分通用するかもしれない。

それに対して、(101) (102) は同定認定の表現にはなっておらず、「責任者として」「医者として」は、動詞「尽くす」「忠告する」にとって必須補語ではなく、副次補語である。このような場合の「～として」は、「に」とも「で」とも交替できない。

(101)a. \*彼は責任者 {に／で} 最善を尽くした。

b. 彼は責任者として最善を尽くした。

(102)a. \*私は医者 {に／で} あなたに忠告します。

b. 私は医者としてあなたに忠告します。

#### 2.2.12. 「に」と「～のために」<sup>49)</sup>

(103) において、「恋人」は太郎がプレゼントを買うことで利益を得ると同時に、そのプレゼントを受け取る者でもあり、また (104) において、「読書」は花子が多くの時間を費やす目的である。よって、「恋人のために」「読書のために」という補語は、動詞「買う〔買ってやる〕」「費やす」にとって必須性がかなり高いと言える。このような場合の「～のために」は、「に」に置き換えることが許される。

(103)a. 太郎は恋人にプレゼントを買った〔買ってやった〕。

b. 太郎は恋人のためにプレゼントを買った〔買ってやった〕。

(104)a. 花子は読書に多くの時間を費やした。

b. 花子は読書のために多くの時間を費やした。

ところが一方、(105) における「家族のために」は、動詞「働く」にとって必須性は高くなく、副次補語と見なされるものであり、このような場合の「～のために」は、「に」に置き換えることが認められない。

(105)a. \*父は家族に一生懸命に働いた。

b. 父は家族のために一生懸命に働いた。

2.2.13. 「と」と「～といっしょに」「～とともに」<sup>50)</sup>

(106) のような場合の「と」は、「～といっしょに」或いは「～とともに」と交替可能である。

(106)a. 母は父と買い物に出かけた。

b. 母は父 {といっしょに／とともに} 買い物に出かけた。

しかしながら、「結婚する」は、2項動作動詞文の内の「共同動作」の表現を成立させる動詞であるが、そのような場合の「と」は、「～といっしょに」や「～とともに」に置き換えることはできない。

(107)a. 礼宮様が紀子さんと結婚した。

b. \*礼宮様が紀子さん {といっしょに／とともに} 結婚した。

注

- 1) Harada (1971), Shibatani (1975), 柴谷 (1978), 塚本 (1984a: 第1章)などを参照のこと。
- 2) 柴谷 (1978: 248) を参照のこと。
- 3) 「先生の本」を一つの名詞句と見なし、先生が書いた本、或いは先生に割り当てるための本を誰かが買った、というように解することは可能であるが、本を買った行為主が先生だ、というように捉えることはできない。
- 4) 注3)と同様のことが言える。「弟の友達」を弟が所有する友達という意で一つの名詞句と見なし、誰かがその友達に本を与えた、というように捉えることはできる。しかし、友達に本を与えた行為主が弟だと解釈することは不可能である。
- 5) 柴谷 (1978: 248-250) を参照のこと。
- 6) Shibatani (1975: 473) を参照のこと。
- 7) Kuno (1973a), 柴谷 (1978), 塚本 (1984a: 第1章)などを参照のこと。
- 8) 「総記 (Exhaustive Listing)」「中立叙述 (Neutral Description)」の詳しいことについては、Kuno (1973a), 久野 (1973b) を参照のこと。
- 9) Shibatani (1972, 1975), Tonoike (1977), 柴谷 (1978), 佐川・菊地 (1978), 塚本 (1984a: 第1章)などを参照のこと。
- 10) Shibatani (1972: 300, 1975: 472), 柴谷 (1978: 264) を参照のこと。
- 11) 村木 (1982), 仁田 (1982b), 塚本 (1984a: 第1章), Tsukamoto (1984b), 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。

- 12) (16) (17) は村木 (1982 : 28) から, (18) (19) (20) は仁田 (1982b : 125) からそれぞれ引用した例文である。
- 13) 寺村 (1982), 塚本 (1984a : 第 1 章), Tsukamoto (1984b), 益岡・田窪 (1987) などを参照のこと。
- 14) 兄が伯父のために車を買って与える, という意ならば, 「に」は可能であると考えられるが, 買うという行為によって車が伯父のほうから兄のほうへ移動する, という今論じている意の場合は, 「に」は不可能で, 「から」しか使えない。
- 15) 塚本 (1984a : 第 1 章) を参照のこと。
- 16) 久野 (1973b), 仁田 (1980, 1982b), 塚本 (1984a : 第 1 章), 益岡・田窪 (1987) などを参照のこと。
- 17) 久野 (1973b : 第 6 章) を参照のこと。
- 18) 仁田 (1980, 1982b), 寺村 (1982), 塚本 (1984a : 第 1 章), Tsukamoto (1984b), 益岡・田窪 (1987) などを参照のこと。
- 19) 仁田 (1980 : 34 - 35, 1982b : 125 - 126) を参照のこと。
- 20) 寺村 (1982 : 183) を参照のこと。
- 21) (36) は, 仁田 (1980 : 34, 1982b : 125) から引用した例文である。
- 22) (37) (38) は, 寺村 (1982 : 183) から引用した例文である。
- 23) 益岡・田窪 (1987 : 82) を参照のこと。
- 24) 寺村 (1982), 塚本 (1984a : 第 1 章), Tsukamoto (1984b), 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。
- 25) 塚本 (1984a : 第 1 章), Tsukamoto (1984b), 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。
- 26) 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。
- 27) 柴谷 (1978), 寺村 (1982), 塚本 (1984a : 第 1 章), 益岡・田窪 (1987) などを参照のこと。
- 28) 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。
- 29) 益岡・田窪 (1987) を参照のこと。
- 30) 村木 (1982), 塚本 (1984a : 第 1 章), Tsukamoto (1984b) を参照のこと。
- 31) (63) と (64) の例文は, 村木 (1982 : 27) の例文を少々補充し, 改変したものである。
- 32) Ohye (1983), 塚本 (1984a : 第 1 章) を参照のこと。
- 33) これについては, 塚本 (1990, 1991) で詳しく議論しておいたので, それを参照して頂ければ, ありがたい。
- 34) 仁田 (1982a : 395 - 397), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 35) 益岡・田窪 (1987), Tsukamoto (1984b), 塚本 (1990, 1991) を参照のこと。

- 36) 仁田 (1982a : 395 - 397), 益岡・田窪 (1987), Tsukamoto (1984b), 塚本 (1990, 1991) を参照のこと。
- 37) これは、『学研国語大辞典〔第二版〕』(金田一春彦・池田弥三郎編, 学習研究社, 1988年) の p.1160にある例文を引用したものである。
- 38) 益岡・田窪 (1987), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 39) 塚本 (1990, 1991) を参照のこと。
- 40) 仁田 (1982a : 395 - 397), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 41) 仁田 (1982a : 395 - 397), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 42) 仁田 (1982a : 395 - 397), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 43) 塚本 (1991) を参照のこと。
- 44) [ ] 内に記した三つの意味・用法は, 仁田 (1982a : 396) に基づいている。
- 45) 塚本 (1991) を参照のこと。
- 46) [ ] 内に記した四つの意味・用法は, 仁田 (1982a : 396) に基づいている。
- 47) 益岡・田窪 (1987), 塚本 (1991) を参照のこと。
- 48) 「同定認定」という用語は, 仁田 (1986 : 204) に基づいている。
- 49) 仁田 (1986), 益岡・田窪 (1987), 塚本 (1990, 1991) を参照のこと。
- 50) 寺村 (1982), 塚本 (1990, 1991) を参照のこと。

## 参 考 文 献

- Harada, Shin-Ichi (1971) "Ga-No Conversion and Idiolectal Variation in Japanese." *Gengo Kenkyu*, No. 60, pp. 25-38. Tokyo : The Linguistic Society of Japan.
- Kuno, Susumu (1973a) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Massachusetts : The MIT Press.
- 久野 暉 (1973b) 『日本文法研究』大修館書店。
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版。
- 村木新次郎 (1982) 「動詞の結合能力をめぐるって」『日本語教育』47号, pp.13-32, 日本語教育学会。
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』明治書院。
- 仁田義雄 (1982a) 「助詞類各説」日本語教育学会編『日本語教育事典』pp.392-417, 大修館書店。
- 仁田義雄 (1982b) 「格の表現形式 日本語」『講座日本語学 10 外国語との対照 I』pp.



- 118-138, 明治書院。
- 仁田義雄 (1986) 「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究—7』pp.103-213, 情報処理振興事業協会。
- Ohye, Saburo (1983) “Some Peculiar Uses of the Particle *no* in Japanese.” *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists*, pp.420-424. Tokyo.
- 佐川誠義・菊地康人 (1978) 「『ヲ-ガ交替』について」『研究報告「日本語の基本構造に関する理論的・実証的研究」』pp.203-231, 昭和53年度科学研究費補助金特定研究(1), 課題番号310721, 研究代表者井上和子(国際基督教大学)。
- Shibatani, Masayoshi (1972) “*Ga-o* Conversion and an Output Condition.” *Papers in Japanese Linguistics*, Vol.1 No.2, pp.296-300. Berkeley, California: Japanese Linguistics Workshop, University of California, Berkeley.
- Shibatani, Masayoshi (1975) “Perceptual Strategies and the Phenomena of Particle Conversion in Japanese.” *Papers from the Parasession on Functionalism*. pp.469-480. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』大修館書店。
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味』第I巻, くろしお出版。
- Tonoike, Shigeo (1977) “*O/Ga* Conversion—*Ga* for Object Marking Reconsidered—.” *Metropolitan Linguistics*, Vol.2, pp.50-75. Tokyo: Linguistics Circle of Tokyo Metropolitan University.
- 塚本秀樹 (1984a) 「文法関係と格助詞——日本語と朝鮮語の対照研究——」大阪外国語大学大学院日本語学専攻修士論文。
- Tsukamoto, Hideki (1984b) “Some Remarks on “Primary Complements” and “Secondary Complements” in Japanese.” *Nebulae*, Vol.10, pp.189-207. Osaka: Osaka Gaidai Linguistic Circle.
- 塚本秀樹 (1990) 「日本語と朝鮮語における複合格助詞について」『アジアの諸言語と一般言語学 西田龍雄教授還暦記念論文集』pp.646-657, 三省堂。
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における複合格助詞について」『日本語学』第10巻第3号, pp.78-95, 明治書院。